諸国物語の成立過程

太刀川　清

近世に流行した怪異小説の大方は、短篇の諸国話の集成として終始した。小説界が仮名草子時代であろうと、浮世草子時代であろうと読本の時代であろうと、この形式はついに変わることがなかったのである。「諸国話」こそ近世怪異小説の基本的な形式であったというべきで、この「諸国話」をまとめて、ある時は、『何々伽婢子』と名付け、また『何々百物語』と名付けるなどして、時に応じてそれなりの名を付けて怪異小説の書名にしたのであるが、中には「諸国話」そのまゝに『何々諸国物語』と名付けることもあった。『一休諸国物語』や、『宗祇諸国物語』などである。それにしても、今日「諸国話」と言えば、怪異談の別称と思われるくらい、怪異小説と「諸国話」との関係は著しいのであるが、その由ってて来るところを「諸国物語」の成立過程から考えてみることにする。

一

「諸国話」はいうまでもなく近世人の諸国への関心から生まれたものである。そしてその背後には、この時代における商業の発展と民衆の知識欲という社会的基盤があったと言われるが、[注1] 確かに言われる通りで、その意味で諸国なることばには新しい時代を迎えた近世人の並々ならぬ意欲がこめられていると言えよう。とすれば「諸国物語」（諸国話）こそある意味で近世人の志向を象徴するもので、鬼の話、天狗の話、幽霊の話とかずかぎりない諸国の話には躍動する民衆のあからさまの姿を見ることが出来るはずである。彼等には「諸国話」は架空の話ではなかった。すくなくとも実在の話として信じられ読まれ語られていたのである。事の多くは昔のことであり、過去のことであり、そしてその場所もまた都会を離れた地方が多かった。「諸国」とは彼等にはその地方の国々を意味していたのであって、都会の統者とは時間的にも空間的にも一定の隔りをもっていたのである。「諸国話」はこうして信じるに足りるものとなって行ったのである。

それでも疑問であれば、あえて実地踏査をこゝろみる者さえもいた。たとえば灰屋紹益である。彼は鈴木正三の『因果物語』を見て、

正三道人とかや集められしとて因果物語とて絵草子有、わらはべのもてあそびたはむれ事におもひなしける事なれども、皆近き世に有しあやしき事ども也　証拠たゞしきものを集めしとあれ共猶あやしき事におもひける程に、我折々行かよひける国々所々道すがらなど、かゝる事や有しと尋ねければ　たしかにさの事有しとかたる所おほし　若はおぼつかなくこたへけるは猶たしかにしらまほしくなりて、ふるき者

にも尋ねさせけるに、一もたがはず有し事共也　（にぎはい草）

紹益の見たのは『因果物語』の平仮名本らしいが、その「諸国話」が確かな話であることをあらためて確認するのである。こうして正三の『因果物語』も「証拠ただしき」ことが確認されてはじめて「諸国物語」となり、彼等の志向にこたえ得たのである。延宝八年刊の『話物語』は「話」と「物語」の区別を試みようという着想であったが、つまるところ「出所有事を物語といふなり」と、証拠の有無がその区別であった。近世の民衆が求めていた「諸国話」とはすべてその出所有ることであり、証拠のあるものであったわけである。それは外でもない、「諸国話」が彼等の知識欲の産物であったから出所、証拠が何よりも問題にされるのは当り前のことであったのである。

爾来、「諸国物語」たる怪異小説がそろって強調するのもそこであったが、その点で先述の紹益の実地踏査は『因果物語』の「諸国物語」たる確認であり、これを諸国の確かな話として認識することでもあった。後日、この『因果物語』の抄出本を名付けて『諸国因果物語』と言って、「諸国」と冠せたのも肯けるのである。

さて、こうしてみると「諸国物語」とは「諸国話」の単なる集成ではなさそうである。形はそうであっても、すくなくとも「諸国物語」は「諸国話」が事実話であるという確認と認識の上に成立していることである。もちろんその確認はひとつ〳〵なされたわけではなかろうが、出版された「諸国物語」にはそういう前提があってのことであった。「諸国物語」と言えば恰も怪異小説の別称とまで思われるようになったのも「諸国物語」にその事実性が取沙汰されるからで、これがまた教訓性を立前とする怪異小説になくてはならない信憑性のよりどころともなったのである。

二

そも〳〵「諸国物語」と名付けた作品には、ひとつの傾向があった。『竹斉諸国物語』（万治・寛文頃刊）『一休諸国物語』（寛文・延宝頃刊）『宗祇諸国物語』（貞享二年刊）『兼好諸国物語』（宝永三年刊）のように人名をその上に冠せることである。[注2] そのうち架空の人物竹斉を除けばあとはいずれも著名な実在の人物である。実在の人物であればこそ証拠たゞしき「諸国物語」は存在価値があることになる。したがって架空の竹斉を冠せる『竹斉諸国物語』の存在は気になるところであるが、果たして「竹斉諸国物語」とは外題だけで、内題は「ちくさい物かたり」とある。上方の寛永版『竹斉物語』を覆刻した江戸版であって、いわゆる「諸国物語」ではない。内容も京の藪医者の竹斉がにらみの介を供に京めぐりから江戸に下る、その道々で演ずる滑稽談で、「諸国話」を集めたものではない。したがって、これは写本『竹斉東下』（寛永年間）『竹斉狂歌物語』（万治年間刊）『竹斉はなし』（寛文十年序）などこの藪医者竹斉を主人公とした一群の滑稽文学の系統に連なるもので、証拠云々を言う「諸国物語」とは異質であることはいうまでもない。

しかし、この竹斉の一群の作品が一休に転じて、『一休はなし』（寛文八年刊）『一休関東咄』（寛文十二年刊）などを誘発するのは重要なことであった。東下する主人公に共通するところを見るだけではなく、竹斉系、一休系と呼び得る一群の作品を考えることが出来るほど、またこの二人を共演させようとする構想が出来るなど、[注3] 当時にあってこの二人はまさに「話」の主役であったのである。そして、その一人に『竹斉諸国物語』があれば、もう一人に『一休諸国物語』があってもよかったのである。

だが、この二人が本質的に異なるのは、一人は架空の人物であり、一人は実在の人物であったということである。しかもその実在の人物が著名な高僧一休宗純であったということは、たとえその人が磊落で、奇智に富んだ者であっても、竹斉のように軽口、当話の滑稽談の主人に終始

するだけではすまされなかったのである。『一休諸国物語』の序には

それ世上に同名はなしの書其類ありといへども是もって実義ならず、幸なるかな此書らくぐわいにさる翁のもとに一休一代記あり、数年の懇望によりもとめ得たり　彼是つゞり梓にちりはめ五巻にあみて一休諸国物かたりと号し今こゝに板行せしめ

と、一休のために言わざるを得なかったのである。「同名はなしの書」とは『一休はなし』や『一休関東咄』のことであろう。そこに収められた滑稽談は「実義ならず」と、高僧一休のためには憚るべきものであった。一休が磊落奇智の僧だという印象をわれ〳〵に与えているのは、近世に入って、いわゆる咄本の主役として登場してからのことで、当時ではむしろ権威ある知識の僧として一休の存在があったはずである。一休に対する憚りとは、たとえばのちの『宗祇諸国物語』を著わすに、作者が宗祇法師にみせた配慮と同じことで、その序文で作者は「今暫く祇の一生をかんがふるに……終年已後又百七十余年をへだつ、今はむかしの物がたり、乃祖は山に姥は河に、耳さへ遠く間あって、野鉄炮の高嘶し聞ゆべきおそれなく、中るべき障りもなき時になりぬ」と、いかにも長い時代を経ているから、もう時効で失礼でもあるまい。だから、こんなたわいない滑稽話も世に出せるのであると言っていることと考え併せるとよい。そこで『一休諸国物語』では、確かにあったとも思われない「一休一代記」なるものをあげて、その人が真面目な高徳の知識僧である一面にふれなければならなかったのである。

さて、「諸国話」の中で高僧を登場させるにはどうするか。それには諸国を巡っては随所〳〵で妖怪変化を調状することで民の安寧をはかったり、啓蒙をこゝろみたりするのが高僧の所為として格好である。ここに「諸国物語」と怪異小説の接近する必然性があったのである。

『一休諸国物語』は、しかし、所詮は過渡期のものであった。所収七十七話は概ね『一休はなし』系の軽口、当話、狂歌咄で怪異談は全体の三分の一程度であって必ずしも怪異小説と言いないかも知れないが、やがてこれが「諸国物語」と名告る怪異小説のひとつの系譜を作ることになることを考えるなら、その意義は小さいはずはない。

『一休諸国物語』の怪異談は『曽呂利物語』のような先行の怪異小説に拠ったもの（巻四「ばけ物の事」）もあり、「虎の威を借る狐」（巻二「一休きつねはなしの事」）、「鼠の嫁入り」（巻二「一休ねずみはなしの事」など通行の寓話に拠ったものもあるが、まとまったところでは『沙石集』や『因果物語』から採られていることが明かにされている。[注4]『沙石集』や『因果物語』に拠ったのは、思うに、それらが当時にあって、仏書としてまた法語として扱われ見做されていたからであろう。たとえば寛文期の書籍目録以来『沙石集』『因果物語』が、『一休法語』『一休骸骨』などとともに「法語」の部に載せているなど『沙石集』『因果物語』の収集の話が知識僧の庶民への教誡や啓蒙に非常にふさわしいものと作者は考えたのである。

三

檜谷昭彦氏は『一休諸国物語』と『沙石集』の関係話としていくつかの例をあげられて、その関係について、『一休諸国物語』が要するに「因果の道理を説くべく、仏法への帰依をうながすべく庶民の教誨をねらって構成された先行説話は、一休和尚の高徳と善知識とを称揚することに振り向けられ、一休の逸話という形を通して、その底に教訓性を組み入れているのである。」と説かれているのは全くその通りであって、まずは怪異小説のひとつのあり方がこゝにある。

ところで、こゝで採られた『沙石集』の同じ話が『一休諸国物語』だけではなく、『諸国百物語』にも採られているのである。延宝五年刊の『諸国百物語』は、いわゆる百物語系怪異小説の原流であって、文字通りの怪談集である。本来、享楽的遊戯である百物語怪談会にちなむこの

「諸国物語」は、同じ「諸国物語」でも教誡性を含む『一休諸国物語』と自ずとその「諸国話」の内容に違いがなければならない。すなわち『沙石集』と『諸国百物語』の関係は、『一休諸国物語』との関係で檜谷氏の言われた「一休の逸話という形を通して、その底に教誡性を組み入れ」た怪談集とは違って、『諸国百物語』は恐ろしい、めずらしい「諸国物語」をもとめて興じる百物語怪談会を背景とした娯楽的な怪談集であった。ここに『沙石集』に発した説話が、怪異小説のもつべき、教誡と娯楽という二つの性格に分岐して、それぞれに展開する様相を見ることになるのである。

その例を説話の関係で示すとつぎのようである。

継女ヲ蛇ニ合セムトシタル事
（沙石集・巻七）

蛇よる〳〵来てむすめを乞事
（一休諸国物語・巻三）

下総の国にて継子をにくみて
わが身にむくふ事
（諸国百物語・巻三）

『一休諸国物語』の刊行年月は、刊記の明記されたものがないため定かでないが、檜谷氏は「書籍目録」の類から勘案されて寛文十一年以降延宝三年以前との目安を立てられた。目下のところこれに従うほかはないだろう。一方、『諸国百物語』の現存のものはいずれも後印であるが、刊記はそのままであるらしいから、延宝五年四月の刊行であろう。したがって『諸国百物語』の話は『一休諸国物語』に拠ったということもあり得るが、『諸国百物語』には後述のように『一休諸国物語』にない『沙石集』典拠のものもあったりするから、直接『沙石集』に拠ったとする方が妥当である。（これは『因果物語』の場合も同様である。）

さて、その三者を併記すると、

『一休諸国物語』

下総国に、あるもの〻妻、十二三ばかりなる。まゝむすめを、大き成、ぬまのほとりへぐし行て、此ぬまのぬしに申けるは、此むすめを、其方へ参らせて、聟にしまいらせんと、たび〳〵いひけり。ある時、また、くだんのぬまにゆき、かくのとおりをいひけるに、俄、世間すさまじくなり、雨風しきりにて、空くもり、ぬまの水たち、すさまじき事、かぎりなければ、いそぎ、家につれかへるに、物のあとより、追くるやうに、おぼえければ、いよ〳〵おそろしくおもひ、かのむすめ、ちゝに取付、日比それがしを、はゝゴカシテ、此女ヲ見ル。

『沙石集』

下総国ニ、或人、継母ノ十二三斗ナルヲ、大ナル沼ノ畔ヘ具シテ行テ、此沼ノ主ニ申ス。此女ヲ参テ、聟ニシマイラセント、タビ〳〵イヒケリ。或時、世間ノスサマジク風吹キ、沼アレタル時、又例ノ称ニイフニ、此女殊ニ恐シク、身ノ毛モイヨ立。風荒クシテ、世間モ暗ク覚ヘケレバ、急ギ逃テ家ヘ帰ルニ、物ノ追心地シケレバ、弥ヲソロシナンド云バカリナシ。サテ、父ガアリケルニトリ付テ、斯ル事コソリツレト云。サル程ニ母モ内ヘ逃入又。其後、大ナル蛇来テ、頭ヲアゲ、舌ヲウ

『諸国百物語』

下総のくに〻松本源八と云人あり。十二三になるむすめ有けるが、母むなしくなりて、源八またのちの妻をよびむかへける。継母此むすめをにくみて、あるとき、あたりちかき沼へつれゆきて、此むすめを、沼の主にしんじまいらせ、むすこにとり奉らんといひてかへり、その〻ち五六度もかくのごとくしけり。あるとき、又、沼のほとりへゆきければ、にわかにそらかきくもり、すさまじく風ふき大雨しきりにふりければ、おそろしくて親子ともにたちかえり、むすめの父にはじめをはりを物がたりし

のぬまへつれゆき、いひし事をかたるに、其夜、大き成、蛇きたりて、くびをあげ、舌をうごかして、此むすめをみては、しばらくありてうせぬる事たび〳〵也。父、此事、なんぎにおもひ、いかがあらんと、なげきかなしむ。其此、一休、同国にましますが、此事、国中にかくれなければ、ふびんの事に、おもひ給ひて、かれがかたへ尋ね行給ひて、なをも子細をとひ給ふに、はじめをはりをくはしくかたる。一休、さらば、我、もんをかき得させん。かさねて来る時、此もんをとなへきかせよ。二だひきたるまじとて、其もんにいはく、此女我女也、母継母也、無我免争可レ取。かくとなへきかす父下蔦ナレドモ、サカ〳〵シキ物ニテ、蛇ニ申シケルハ、此女ハ我女也。母ハ継母ナリ。我ガユルシナクテハ、争力取ルベキカ。母ガ詞ニ不レ可レ依、妻ハ夫ニ随フ物ナレバ、母ヲバ心ニ任ス。トルベシト云時、蛇、女ヲバ捨テ、母ガ方ヘハイユキ又。其時、父此女ヲ具シテ逃又。此蛇、母ニマトヒ付キヌ。母モ物狂シク成テ、既ニ蛇ニ成リカヽリタルト聞エキ。文永年中ノ夏比、[1]此事申出て、来八月三日大雨大風吹キアルタラム時、可レ出ト申ト沙汰シキ。実ニ彼日ヲビタヽシクアレテ、雨風烈ク侍リキ。正ク出ケル時ハ聞ザリキ。人ノ為ニ腹悪キハ、躾テ我身ニヲイ侍ルニコソ。因果不レ可レ凝フ。

ければ、父源八もまゝ母の心ざしをにくみ、切ころさんとおもひぬける所へ、そのたけ四五町がほどもつゞきつらんとおぼしき大じゃきたり、くびをあげくれなひのしたをうごかし、此むすめにむかふ。源八これを見て、いかに大蛇此むすめはわが実子也。たとい継母がゆるすとも、それがしゆるすとも、それがしゆるしなくては、此むすめはかなふまじ。そのかわりに継母をなんぢにまかするぞといひければ、そのとき大じゃ継母のほうにむかってしたをうごかす。そのまに源八はむすめをつれてにげさりぬ。大じゃは継母を七巻やへにまとい、大あめいなびかりして沼のうち[4]につれかへりぬ。まゝ子をにくみてかへってべし。重ねてきたるまでと、かきてつかはさるゝ、此もんの心は、此むすめは我子也。はゝはまゝはゝなり。我がゆるしなくては、とるべきと、いふ心なり。男、よろこびくだんの蛇のきたるをまちける所に、又れいのごとくすさまじくして来る。さればこそ、とおもひ、さづかりし文を一〻となへきかせしかば、たちまちきへてうせにけり。ちくるいといへども、物のだうりを能わきまへ二度来らず、と、申二度来らずと、申伝へ侍り。一休を権者といはん物はなし。

その身にむくいしと也。

『沙石集』から『一休諸国物語』への過程は、檜谷氏の説かれるところに従うべきで、要するに、末段の「一休権者といはん物はなし」の一句を具体化するようにはかられている。『諸国百物語』では『沙石集』の末尾の、文永年中の夏、風雨の激しい日に蛇体となった妻が沼に現われると沙汰する段(傍線1)は、文永年中では時制が古すぎ、しかもそれが「正ク

出ケル出事ハ聞ザリキ」(傍線2)ものであったから省かれことになる。いつの場合でも奇異の事実をを立前とする「諸国物語」では、不確実のことは埒外でなければならない。また、『沙石集』の最後「人ノ為ニ腹悪キハ、躯ヲ我身ニヲイ侍ルニコソ、因果不レ可レ凝フ」(傍線3)とある教訓的な叙述は、ただ「まゝ子をにくみてかへってその身にむくいしと也」(傍線4)と簡単にとどめられている。百物語の「諸国話」には教訓的性格は少ないほどいいのである。『諸国百物語』のこの末尾は決してその教誡的叙述ではなく、継母の身に報われた恐ろしさを強調するもので、こゝでは『沙石集』の教訓も、『一休諸国物語』の「一休を権者といはん物はなし」という一休の高徳ぶりも必要はなかったのである。

また『沙石集』巻七「蛇ノ人ノ妻ヲ犯シタル事」は『一休諸国物語』には採られなかったが、『諸国百物語』で採られ「遠江の国にて蛇人の妻をおかす事」(巻四)となった。ここでも、末尾の例の教誡的な叙述「道理ヲ申述ズシテトカク拒ガマシカバユ、シキ災ナルベシ、物ノ命ヲ害スル事慎ムベキ物ナリ」とあったのは「へびはちくしゃうなれども物のどうりをきゝけるこそふしぎなれ」と奇異の事実を述べて終っている。さらに『沙石集』巻七「妄執ニヨリテ女蛇ト成ル事」は「渡部新三郎が娘若宮の児におもひそめし事」(巻三)となるが『沙石集』の末段の執着愛執の恐るべきことを戒めたところは省かれて、ただ「おそろしき事ども也」とだけ簡単に言ってすませているのが『諸国百物語』であった。

四

さて、『沙石集』の話がそうであったように『因果物語』の話もまた『一休諸国物語』、『諸国百物語』の両方に採られているものがある。その例を説話の関係で示すと次のようである。

妬深女死シテ男ヲ取殺スコト付女死シテ蛇ト為、男ヲ巻事（因果物語片仮名本・上）

↘ 蛇寺の事（一休諸国物語・巻三）

執心ふかき女の蛇に成たる事（因果物語平仮名本・巻一）

↘ 土佐の国にて女の執心蛇になりし事（諸国百物語・巻四）

ただし、この場合の拠ったのは同じ『因果物語』でも『一休諸国物語』は「片仮名本」(付話の方)、『諸国百物語』は「平仮名本」である。拠るものが異なるのは二つの「諸国物語」の性格を語るものではあるまいか。一般に片仮名本は類話を集めた付話を含めて一章とするなどきわめて短篇で、その文章も生硬であるから平仮名本にくらべて読み物としての興味は少ないようである。したがって、一休の高徳やら善知識やらを称揚する「諸国話」を構成する素材として扱うだけなら活用しやすく格好であったと思われる。ここで採られたのは、付話として載せた二話であって、本話の「妬深女死シテ男ヲ取殺スコト」は採られない。

『因果物語』(片仮名本)

(○「妬深女死シテ男ヲ取殺スコト」は採られず)

○寛永年中、大原ニ如応ト云道心者アリ。彼発心ノ所謂ヲ聞ニ、大工ニテ京ニ居ケル時、女房果テ後、本ノ女房ノ姪ヲ妻ト為ケリ。或時、昼寝シテ居ケル、空ヨリ蛇サカリ、舌ヲ出シテアリ。是ヲ取捨ケレバ、

『一休諸国物語』

嵯峨に了意房と申道心者ありける。いつの比より、くびに蛇まとひ付てはなれず。さま〳〵な事をなして、漸こはなせば、また夜のまにはもとのごにくにまとひ付、ことにひじり切たる房主なれば、

亦来、後頸ニ巻付テ離ズ。為方無シテ、発心シ、髪ヲ剃、托鉢シケレトモ、蛇更ニ去ズ。後ニ高野山ヘ登処ニ、不動坂ニテ蛇失ケリ。悦、三年居テ下ルニ、本ノ坂ニテ蛇又頸ニ巻付タリ。人々怖ヲ作故ニ、手拽ヲ巻テ居ケリ。数年経テ後、上京相国寺の門前、報土寺権誉上人を拝シ、一々懺悔シテ十念ヲ授テ、久シク念仏シケレバ、イツト無、蛇失タリト也。

○大阪陣の二三年以前、駿河府中インレイ町狐崎ノ近所、原田次郎在衛門宿、四五間近所ノ者、信州ヘ行テ女房ヲ求メテ居ケルガ、暫在テ駿河ニ帰ケリ。信州の女房来、其有様怖シ、駿河ノ女房、是ヲ見、逃行、夫ニ角ト云。夫、彼女ヲ賺、三保ノ松原ヘ伴テ行、舟遊シテ、海ニ入テ殺ケリ。頓、蛇ト為テ腰ヲ巻。何程切テモ亦巻ニ依テ、為方無シテ、高野ヘ行テ居タルト也。

日ごにさがより京へ出て、鉢をこひけるに、彼蛇をかくさんがために、ゆたんを首にかけて、みえざるやうにして出けるが、此事、ひとへに難儀におもひ、其比、さか二尊院に一休おはしけるに、かのばうず尋ね行、我身のやうだいを、くはしくかたりければ、一休きゝ給ひて、いかさまそれは女のしうじゃく成るべ。しからば、汝、是より高野山へ上り候へ。さもなくばのく事あらじと、をしへ給ふ。了意、いよ〳〵ありがたき事におもひ、高野山に二三年もすみしが、今ははやしうしんへびの事もうちわすれ、すきしふるさとのこひしさに、またさがへかへりしが、二三日は何の子細もなかりしに、又、よのまにくだんの蛇まとひつきけり。其まゝ高野にすむならば、いよ〳〵めでたかるべきに、何ぞや、またふるさとへかへり二たびなんきにあふ事さだまれるごうのほどこそかなしけり。今に、此房主すみしあとあり。蛇でらとぞみな人申あへり。

『一休諸国物語』は『因果物語』の付話の二話を前後を入れ替えて構成したもので、二話は高野山詣で結ばれている。この場合高野山は、道心者を禍から救うために一休の登場を促すために必要であっても、この道心者がなぜ蛇にまつわりつかれることになったのか、その経緯については、一休の知識僧ぶりを描くためには、特に必要はない。もしあれば、話の中心が二分して折角の高僧の存在意義が薄れてしまうことにもなりかねない。しかし怪談会での「諸国話」で興味をひくのは、その禍の由来するところ、すなわち『一休諸国物語』て「我身のやうだいをくはしくかたり」と言うところの具体的な内容である。読み物として興味のある「平仮名本」の話は、娯楽的な怪談会の「諸国物語」には好都合であった。

『因果物語』

駿河国府中院内町、狐崎の近所の者、信濃に行て、逗留のあひだに、ある女房をかたらひて、わりなく契りけるが、ほどへてのち、するがの国の故郷へ帰りけるに、かのしなのにて、かたらひける女、跡を追てするがに来り、かやうの人は此家におはするや、我はしなのゝ者なるが、ふかき約束ありて、これまでまいりたいといふ。その姿まことにおそろしかりければ、するがの本妻、此由を見て、内に逃入、夫に此よしをいひければ、夫出合て、彼女をよくよくすかして家によび入て置けり。ある時、

『諸国百物語』

土佐のくにゝ猟をして世をわたる人あり。男は四十女は四十五六にてありしが、此をんなかくれなきりんきふかきものにて男かりにいずるにもついてあるきける。男あまりのうるさゝに、あるとき猟にいでけるに、かの女ばうあとよりれいのごとくついて来る所をとってひきよせさしこうしければ、かたはらなる大木のねより大きなる蛇いでゝ男のくびにまといつきける。男わき指をぬき、ずん〳〵に切はなせば、またまといつき〳〵やむことなし。男せんかたなく高野へまいりければ、ふどう坂の中

三保の松原みせんとて、女を伴ひゆき、いざや舟あそびせんとて、沖へ舟をこぎ出しかの女を海へつきはめしに、即時に、蛇に成りて夫の腰にまとひ付て、つよくしめければ、夫めいわくして取てすてんとすれども、かなはず、更にすべきやうなし。つら〳〵案じけるは、高野山は女人結界の山なれば、若、はなるゝ事も有べしとおもひ、高野にのぼりしに、案ののことく不動坂にて、かの蛇はなれ退て跡に留まる。夫うれしくおもひ、三年の間、山に居て、今はさりとも執心もきれんと思ひ、故郷にかへらんとて、不動坂を越るに、彼蛇、又、もとのことくまとひ付て腰をしめけり。夫、力なく故郷へ帰るに、近江の国やばせの渡し舟にのりて、沖中まで舟を出したれは、此舟、更にうごかず。舟かたも大にあやしみて、いかさまにものり合の衆の中に子細ある御方有へしとて、色〳〵せんさくいたしけれは、彼夫の腰太くして、蛇のかたちみえけり。人〳〵申すやう。かゝる残ましき事は、聞及はず。どにて蛇くびよりはなれおち、くさむらのうちへはいりける。男うれしくおもひ、高野に百日あまりとうりうして、もはやべつぎもあるまじきとおもひ、山をげかうしければ、ふどう坂の中ほどにてかの蛇くさむらのうちよりはひ出て、また男のくびにまといつく。男もぜひなくてこれよりくはんとうへしゆぎやうせんとて、すぐにたびたち、大津のうらにてのりあひのふねにのりけるが、をき中にこぎ出しければ、舟あとへもさきへもゆかず。せんどう申けるは、のりあひのうちになにゝてもおもひはする事あらば、まずすぐにかたり給へ。一人のわざにてあまたの人のなんぎなるぞといひければ、かの男ぜひなく、くびの綿をとり、さだめしてこのゆへなるべしとて、蛇をみせ、はじめをわりをざんげしければ、人々おどろき、はやく舟を出給へとせめければ、今はこれまで也とてかの男うみへ身をなげはてにけり。そのときくちなはゝくびをはなれ、大津のかたへをよぎゆきけり。ふねも誠にふびんながら数多の人の命には替かたしとて、彼夫を海へ突はめけれは、舟は子細なく岸に渡つきけり。非分の所為、三年の間に報けり。慶長十七年の事也。

さうなくやばせにつきぬと、せんどうかたりしを聞はんべる也。

『諸国百物語』では、悋気を嫌って殺害した女房の怨念が蛇となって夫の首に巻きついて離れないことになっている。これは『一休諸国物語』のいわゆる「我身のやうだい」と言った内容に当たる。また『因果物語』につけば、旅先で契った女が追って来たのをうるさく思った男が女を殺害したところで、『諸国百物語』は少し目先を変えただけで大差はない。こうして『因果物語』の筋を従いながら例によって最後の「非分の所為三年の間に報いけり」と因果応報を強調する叙述は省かれてしまっている。いずれにせよ原話の教誡性を薄めるところに『諸国百物語』の狙いがあったのである。

また『因果物語』巻二「妬て殺せし女主の女をとり殺す事」は、『一休諸国物語』には採られなかったが、『諸国百物語』で採られて「端井弥三郎幽霊を舟渡せし事」（巻四）とした。妾を愛してこれとしめしあわせ女房を殺害した庄屋が処刑されたのを「ぜんだいみもんの事也とて、かの庄屋をせいばいなされけると也」としたところは、『因果物語』では非道に殺された女の怨念の著しさを説いて「よしなきことはかならずむくひあり」と大方の戒めとした部分に当たるものであって、『諸国百物語』が『因果物語』の教誡性を捨象したところに成立することになる。

五

『沙石集』や『因果物語』に端を発した近世の「諸国話」は、『一休諸

国物語』と『諸国百物語』で二つの形式の怪異小説の「諸国物語」となって今後に進展することになる。それは旧く山口剛氏が「諸国物語」を分けて「旅客の諸国に於ける見聞に託し、さなくも諸国に配する形式をとる」（『怪異小説研究』）と言われたところでもある。『一休諸国物語』につづいて「旅客の諸国に於ける見聞に託し」た「諸国物語」は、貞享二年刊の『宗祇諸国物語』である。両者を比較するなら、そこに必ずや怪異談の色彩を強めていく「諸国物語」の展開の相を見ることが出来るはずである。

（注1）野田寿雄氏『西鶴』（一九五八年）第三章「諸国ばなしといふ事」参照。

（注2）他に『其磧諸国物語』（延享元年正月刊）『最明寺殿諸国物語』（明和九年正月刊）などがある。また「書籍目録」で見るかぎり『芭蕉翁諸国物語』もある。

（注3）『杉揚子』（延宝八年刊）は竹斉と一休の二人を主人公とする。二人の絡み合いについては、二村文人氏「一休説話の展開と竹斉の接近」（「都大論究」第十五号、一九七八）に詳しい。

（注4）檜谷昭彦氏「因果物語と一休諸国物語」（『近世小説・研究と資料』・昭和三八年十月）所収。のち同氏著『井原西鶴研究』にも所収。